

発行：〒656-0011 兵庫県洲本市炬口1-3-19 東亜天文学会速報部

郵便振替口座：00980-8-189107 加入者名：東亜天文学会速報部 購読料1部130円

Published by the Department of Yamamoto Circular, Oriental Astronomical Association

Collaborating with the Computing and Minor Planet Sections

P. O. Box No.32, Sumoto, Hyogo-Ken, 656-8691 JAPAN

e-Mail address: (Subscription) URL: <http://www.oaa.gr.jp/~oaacs/yc.htm>

編集：中野 圭一 ☎ 0799-22-3747 Fax: 23-1104 e-Mail address:

Editor: *Syuichi Nakano*, 3-19, Takenokuchi 1 Chome, Sumoto, Hyogo-Ken, 656-0011 JAPAN

ギブズ新周期彗星 P/2008 Y2 (Gibbs)

ギブズ (*A. R. Gibbs*) は、2008年12月31日にカテリナ・スカイサーベイの68-cm シュミットを使用してしし座を撮影した搜索フレームの次の位置に18等級の新彗星を発見した。発見当時、彗星には、良く集光した13"のコマと西に約20"の尾が見られた。翌1月1日にレモン山の1.5-m 反射で行なったビショール (*E. Beshore*) の観測によると、彗星は、集光氏、西に伸びた1'の尾が見られた。小惑星センターのスパール (*T. Spahr*) は、この彗星がレモン山サーベイから報告された2008年12月1日の天体、カテリナ・スカイサーベイから報告された12月21日の天体と同定できることを見つけた。彗星は、多くの観測者によって追跡され、スカッチ (*J. V. Scotti*) が1.8-m 反射で行なった1月1日の観測では、彗星には9"のコマと30"ほどの尾が西に伸びているのが観測された (IAUC 9008)。

2008 UT	α	(2000)	δ	Mag.
Dec. 31. 36701	10 ^h 04 ^m 12 ^s .21		+19° 49' 55".3	18.2

OAA 速報部では、2008年12月1日から2009年4月17日までに行なわれた347個の観測から次の軌道を決定した。上尾の門田健一氏 (*K. Kadata, Ageo*) による彗星の CCD 全光度は、1月1日に18.4等、9日に18.1等、2月6日に17.7等、3月1日に17.6等、28日に18.0等と観測されている。位置観測は、秦野 (浅見敦夫)、芸西 (関勉)、守山 (井狩康一)、群馬 (佐藤英貴)、北見 (円館金) から報告された。なお、彗星は、周期が約7年の新周期彗星であった。

T = 2009 Jan. 22.4006 TT	Epoch = 2009 Jan. 9.0 TT
$\omega = 162^\circ.3370$	e = 0.543660
$\Omega = 330.8937$	a = 3.590449 AU
i = 7.2753	n° = 0.1448708
q = 1.638466 AU	P = 6.80 年

マックノート新周期彗星 P/2008 Y3 (McNaught)

マックノート (*R. H. McNaught*) は、サイデング・スプリングで50-cm ウプサラ・シュミットで2008年12月31日にらしんばん座を撮影した搜索フレーム上の次の位置に16等級の新彗星を発見した。発見当時、彗星には、強く集光した12"のコマと西北西に約15"の太い尾が見られた。発見光度は、近くにある恒星のため、多少明るく測光されているとのこと。イタリアの観測者ら (*R. Ligustri & E. Guido et al.*) が米国にある25-cm 反射を遠隔操作した1月1日の観測では、彗星には、20"ほどのコマが観測された。また、ツーソンのマックガハ (*J. E. McGaha*) による36-cm 反射による同日の観測では、恒星状の核と西北に74"の尾が観測された (IAUC 9009)。ドイツのメイヤー (*M. Meyer*) は、2007年末にルーリン・サーベイとレモン山サーベイから報告された、それぞれ、12月18日と12月31日に行なわれた1夜の観測群中にこの彗星の観測を見つけた。このとき、彗星の光度は17等級であった。

2008 UT	α	(2000)	δ	Mag.
Dec. 31. 64373	08 ^h 51 ^m 56 ^s .50		-21° 59' 43".3	16.3

OAA 速報部では、2007年12月18日から2009年4月20日までに行なわれた131個の観測から次の軌道を計算した。上尾の門田健一氏 (*K. Kadata, Ageo*) による彗星の CCD 全光度は、1月1日に18.1等、9日に17.9等、2月21日に17.8等と観測されている。位置観測は、秦野 (浅見敦夫)、芸西 (関勉)、守山 (井狩康一) から報告された。彗星は、周期が約23年の新周期彗星であった。

T = 2009 Jan. 11.9509 TT	Epoch = 2009 Jan. 9.0 TT
$\omega = 238^\circ.2766$	e = 0.447674
$\Omega = 262.9355$	a = 8.028396 AU
i = 38.8138	n° = 0.04332723
q = 4.434291 AU	P = 22.75 年

NEAT 周期彗星 212P/NEAT (2000 YN₃₀)

NEAT サーベイから 2000 年 12 月 26 日におうし座を撮影した検索フレーム上の次の位置に発見された 20 等級の小惑星状天体が報告され、この天体には、小惑星の仮符号 2000 YN₃₀ が与えられた。小惑星には、発見前の 2000 年 12 月 1 日の観測が見つかり、2001 年 2 月 21 日まで 82 日間、追跡され、近日点距離が $q = 1.65$ AU、離心率が $e = 0.58$ 、軌道長半径 = 3.92 AU を動く、彗星型の特異小惑星であることが判明した。

小惑星は、2008 年 10 月 30 日にキットピークの 91-cm スペースウォッチ望遠鏡で、20 等級で再観測された。この小惑星は、2009 年 1 月 2 日になって、カテリナの 68-cm シュミットで捕らえられた。そのとき、ギブズ (*A. R. Gibbs*) は、この小惑星には、小さな 7" のコマと西に 35" の細い尾があることに気づいた。さらに、ルーリンの観測者 (*Y. C. Cheng & H. Y. Hsiao*) から、同日、1.0-m 反射で、この小惑星を観測したところ、西北西に 20" ほどの尾が見られること。1 月 7 日にスペースウォッチ II 望遠鏡でこの小惑星を観測したスカッチ (*J. V. Scotti*) から、小惑星には 8" のコマと西北西に 2'.2 まで伸びた細い尾が見られることが報告され、この小惑星は、彗星であったことが判明した (IAUC 9010)。

Date UT	α (2000)	δ	Mag.	Observer
2000 Dec. 26.46926	04 ^h 19 ^m 20 ^s .45	+06° 03' 33.1"	20.4	NEAT
2008 Oct. 30.48499	08 50 58.52	+15 37 57.6	20.5	Spacewatch

OAA 速報部では、2000 年から 2009 年までに行なわれた 60 個の観測から次の連結軌道を計算した。前回発見時の近日点通過は T = 2001 年 2 月 25 日であった。平均残差は $\pm 0''.64$ (<http://www.oaa.gr.jp/~oaacs/nk/nk1744.htm>)。

T = 2008 Dec. 3.26907 TT	Epoch = 2008 Nov. 30.0 TT
$\omega = 15^\circ.04842$	$e = 0.5788759$
$\Omega = 98.92899$	$a = 3.9286860$ AU
$i = 22.39793$	$n^\circ = 0.126570677$
$q = 1.6544645$ AU	$P = 7.787$ 年

LINEAR 新周期彗星 P/2008 WZ₉₆ (LINEAR)

LINEAR サーベイからみずがめ座を 2008 年 11 月 30 日に撮影した検索フレーム上に発見された 18 等級の小惑星状天体が報告された。この小惑星は、12 月 1 日と 2 日に各地で追跡観測が行なわれ、小惑星の仮符号 2008 WZ₉₆ が与えられた。しかし、その後の 12 月 3 日以後の観測は、報告されなかった。小惑星センターでは、約 1 ヶ月後の 12 月 28 日に同サーベイで発見された 1 夜の天体群の中に、同じ天体が写っていることが見つけ、その軌道が確定した。

2009 年 1 月 20 日になって、51-cm f/4.3 反射でこの小惑星を観測した ASO のシェロード (*P. C. Sherrod*) は、この小惑星には、丸くて小さい集光部が中心部を取り巻いていることを観測した。氏は、2 週間前に撮影した画像も見たが、同じようにわずかに拡散状であった。1 月 29 日に 61-cm f/16 カセグレインで観測したカリフォルニアのヤング (*J. Y. Young*) から、小惑星には、6" ほどの円形のコマがあることが報告された。さらに、1 月 30 日のツーソンのマックガハ (*J. E. McGaha*) が 36-cm f/10 シュミット・カセグレインで行なった観測でも、小惑星には、恒星状の核に丸い 12" のコマが観測され、この小惑星は、彗星であることが判明した (IAUC 9015)。なお、秦野の浅見敦夫氏 (*A. Asami, Hadano*) も、12 月 2 日にこの小惑星の追跡観測を行ない「天体には、コマがあるようにも見える」と報告している。このとき、氏の核光度は 17.9 等であった。

2008 UT	α (2000)	δ	Mag.	Observer
Nov. 30.06444	22 ^h 24 ^m 11 ^s .08	-16° 41' 49.6"	18.3	LINEAR
Dec. 28.06701	23 21 01.03	- 8 43 02.4	18.1	"

OAA 速報部では、2008 年 11 月 30 日から 2009 年 2 月 28 日までに行なわれた 129 個の観測から次の軌道を決定した。彗星は、周期が 6 年ほどの新周期彗星であった。

T = 2009 Jan. 23.9194 TT	Epoch = 2009 Jan. 9.0 TT
$\omega = 337^\circ.6253$	$e = 0.509430$
$\Omega = 59.1130$	$a = 3.355667$ AU
$i = 6.9577$	$n^\circ = 0.1603378$
$q = 1.646190$ AU	$P = 6.15$ 年